

穀物  
から

# ビール 焼酎 日本酒



右から麦焼酎「駒」(720ml 1000円、税抜、以下同)。地ビール「穂倉金生」(330ml 505円)。日本酒「穂倉千徳」(720ml 1343円)。焼酎を9月、ビールをお中元用に7月、日本酒を12月のクリスマス前と売り出し時期を分散させて、年中酒の売り上げを確保する



焼酎の原料ミヤザキハダカに最初に挑戦した栽培地。作付と同時に大きな看板を設置。「ここからはなどうの酒づくりのすべてが始まった」と代表の黒木親幸さん

もう大手の芋焼酎も缶ビールもやめた

ここは県内外から年間21万人が訪れる(農)はなどうの直売所「杜の穂倉」。なかでもみんなのお目当ては、焼酎、ビール、日本酒がずらりと並ぶ酒コーナー。どれもはなどうが栽培した麦や酒米を使った、オンリーワンの酒ばかり。いまやこの一角だけで、年間1500万円以上の売り上げがある。

はなどうが麦焼酎を発売したのは2010年秋。翌11年には地ビール、13年に日本酒を、それぞれ県内の酒造会社と共同開発してきた。「この辺りで、飲むといえは前は芋焼酎だった。土産にも隣の都城市の大手メーカーの芋焼酎を引っ提げていくのが常だった」と代表の黒木親幸さん(68歳)。それが近年はすっかり高原町産わが麦焼酎に置き換わった。

「自分で飲むのはもちろん、寄合で集まるときも、土産に持つていくのもみなさんこの酒。私なんか缶ビールだって大手のものは一切飲まなくなったし、焼酎も麦ばかり。日本酒もよう飲むようになった。もう100%置き換わった。だって自分でつくって自分で飲まないなんてお酒に失礼。第一、うまくてよかと」



直売所「杜の穂倉」。宮崎自動車道の高原インターから車で5分のところにある



高原町は人口約9300人。2011年1月に霧島山系の新燃岳が噴火した際は、花堂区の麦畑全域に火山灰土が積もったが、総出で除去して収穫にこぎつけた

# 集落営農の3つの酒が むらの寄合も家飲みも土産も制覇

宮崎県高原町・農事組合法人はなどう

宮崎にはなんと、焼酎、日本酒、ビールまでつくって販売している

「お酒の集落営農」がある――

文・写真＝編集部